

カナの婚礼

ヨハネによる福音書 2:1-11

三日目にガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった。花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

説教

イエスを信じるか、信じないかはイエス物語を信じるか信じないかということです。イエスさまは約 2000 年前のお方です。わたしたちは物語をとおしてしか知ることはできないからです。いまの時代なら撮影された映像なり写真なりで過去の人も知ることはできますが 2000 年前ではそれもありません。

きょうのヨハネ福音書 2 章冒頭に語られる「カナの婚礼」は四つの福音書の中でもとくに印象深く記憶に残る物語のひとつです。物語は「三日目に」という日時を指定して始まり、

場所が示され（ガリラヤのカナ）

物語の登場人物（母マリア、イエス、弟子たち）がでてきます。

そして出来事（ぶどう酒が足りない）と続きます。

筆使いにまったく無駄がない物語としては最高の滑りだしです。

母とイエスの問答があり（ここはすこしわかりにくい箇所です）六つの水がめが小道具として示され、すぐに召使たち、世話役、花婿と出来事の進行役になる役者が登場して彼らによってイエスが水をワインに変えたという奇跡が語られます。

そして物語は「栄光を現わされた」とめられます。

イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。ヨハネ 2:11

よい物語には伏線があります。きょうのカナの婚礼にも伏線があります。

でだしの「三日目」母とイエスの問答のなかでの「わたしの時」、「六つの水がめ」などです。

「三日目」は天地創造物語の第三の日に（創世記 1:9-13）

「わたしの時」は最後の晚餐の準備に（マタイ 26:18）

「六つの水がめ」は逃れの六つの町（民数記 35:6）または、六つの乾いた農地（エズラ 6:42）

これらの旧約・新約聖書をとおして読めば「カナの婚礼」を奇跡物語だけではなく神の物語として深く知ることもできそうです。

さて、イエス物語の読み方として奇跡はほんとうの話か、作り話かと詮索する読み方はイエスの真実から遠ざかる読み方です。かといってまったくの本当のはなしだとして信じ込むのも偏った読み方です。じつはガリラヤのカナではヨハネ福音書に書いてあること以上の信じられないような奇跡がおきていたのかもしれませんが。それをそのまま物語っただれも信じない、相手にされないのです。このような伝承として伝わっているのかもしれませんが。ヨハネ福音書はさいごにこう結ばれています。

イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くなれば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。ヨハネ 21:25

わたしたちがイエス物語を通してイエスさまをさらに深く信じることができますように。
